

おとうさんのアイフォン



ぼくのおとうさんは、^{さかなや}魚屋さんだ。

まいにちあさはや ^{いちば} いちば ^い い
毎日朝早く市場へ行き、

^{さかな} さかな ^{しい} しい
いっぱい魚を仕入れてくる。



おとうさんは時間じかんができると、すぐに 아이폰 をいじる。

ふと おやゆび 太い親指を、ぐりぐりところすりつけ、じっと画面がめんを見ている。



ちょっと前、キッチン^{まえ}のテーブルにおとうさんのアイフォンが
置き^お忘れ^{わす}て^てあった。ぼくはそれを手^てに取^とった。

なんだかとても、生臭^{なまぐさ}かった。おとうさんの、手^てについた匂^{にお}いだ。



ぼくはとってもいやになって、すぐ^{ほお}に放^だり出した。

まいにち いちば さかな しい
おとうさんは毎日、市場で魚を仕入れ、
あいた時間にはいつもアイフォンをみている。



ある日、おkaaさんが教えてくれた。

おとうさんは昔、「あいていー」の仕事をしていたそうだ。

「おれの作ったサービスで、みんなを幸せにする」が口癖だったらしい。



だけど、さかなやさんをしていたおkaaさんのおとうさん、

つまりぼくのおじいちゃんがギックリ腰で働けなくなった時、

頼まれてお店の後を継いだんだ。

「ほんとうにいいの?」とたずねたおかあさんに、
おとうさんは「今度は魚屋で、みんなを幸せにするんだ」って
わら
笑っていたんだって。



きょう
今日はめずらしく、おとうさんの昔むかしの仕事しごとのなかまたちが

うちあつに集えんかいまって、宴会えんかいをしている。

みんながめいめいに、自分じぶんのアイフォンを見みせ合あって、何なにか話はなしている。

そうしていたら、テーブルにたくさんアイフォンが並ならんじゃった。

だれだれが酔よっぱらって言いった。

「あれ？どれだれが誰だれのかわからなくなっちゃった」



ぼくはアイフォンに次々顔^{つぎつぎかお}を近づけて、そのうちの^{ひと}一つ^とを取り上げた^あ。

「これがぼくの、おとうさんのアイフォンだよ！」

おとうさんが手^てにとって^{たし}確かめた。

「ほんとうだ。よくわかったな」

みんな^{おどろ}驚いていた。ぼくは^{じまん}自慢げ^いに言った。



「おとうさんのアイフォンは、おとうさんの^{にお}匂いがするから」

おとうさんは、うれしそうに^{わら}笑ってた。

まいにちさかな し い み
おとうさんは毎日、魚を仕入れ、そしてアイフォンを^み見ている。

